

# 複式学級における学習指導

改訂版Ⅱ



奈良県教育委員会事務局  
学校教育課



## 本書の発刊に当たって

現行の学習指導要領では、子どもたちの知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」をより一層育むことを目指し、学校・家庭・地域が相互に連携し、地域全体で教育に取り組むことの重要性が示されています。本県においては、先進校における研究成果の周知を図り、言語活動や個に応じた指導の充実とともに、学校・家庭・地域の連携・協力による教育の推進に努めてきました。

近年の全国的な少子化の波は、学校の小規模化を加速させ、教育条件への影響が懸念されています。このことから、平成27年1月に文部科学省は、少子化に対応した活力ある学校づくりに向けた手引を作成したところです。その中では、へき地や過疎地など学校が地域コミュニティの存続に決定的な役割を果たしている等の地域事情により、学校統合が困難であると考えられる場合には、小規模校のメリットを最大化するとともに、デメリットを最小化するような工夫を講じていく必要があると示されています。

県教育委員会では、小規模校における学習指導の充実を図るために「複式学級における学習指導」を平成25年3月に作成しました。本書は、冊子を活用いただいている先生方の意見を参考に改訂を重ねたものです。

複式学級の構成上の特性は、「少人数からなる異学年集団」です。この特性を最大限生かすという発想をもって学習指導に取り組んでいくことが大切です。少人数であることは、個に応じた指導が行いやすく、異学年集団は、より豊かな人間関係づくりが可能になります。また、間接指導等で子どもの主体的な学習態度を育むためには、指導者が授業のねらいをより明確にし、子どもが見通しをもって学習に臨めるよう指導改善を図ることが必要です。しかし、これらのことは、複式学級における学習指導にだけ求められるものではありません。

本書を参考に、複式学級の特性を「複式学級だからこそできる」というよさとして捉え、指導を工夫するとともに、複式学級のみならず、全ての学校における学習指導の改善に役立てていただき、児童の学習意欲を高め、主体的な学びを創造していただきますようお願いいたします。

平成27年3月

奈良県教育委員会事務局  
学校教育課長 大西英人

# 複式指導のよさ

〔平成25年12月実施アンケート結果より〕

## 主体的な学習態度を育てることが出来ます

間接指導を通して、見通しをもつて学習する態度を身に付けたり、自分の力で考えたり、試行錯誤したりする「自ら学ぶ姿勢」を育てることが出来ます。

## 子ども同士で学び合う姿勢を育てることが出来ます

間接指導の中で、児童が役割分担して学習活動を進めていくことで、互いに「学び合う姿勢」を育てることが出来ます。

また、相手に分かりやすく伝えるために必要となる表現力の向上を図ることが出来ます。



## 学習活動の活性化を図ることが出来ます

学級の人数が増えるので、話し合い活動等が活性化し、多様な見方や考え方を身に付けることが出来ます。

## 異学年間の望ましい人間関係を育成できます

上学年は下学年に対してリーダーシップを発揮し、下学年は上学年から学ぼうとする態度を身に付けるなど、望ましい人間関係を育てることが出来ます。

また、それぞれの児童に活躍の場を与えることで、自己実現や自尊心の高揚を図ることが出来ます。



# 目次

I 複式教育の現状	・・・ 1
1 複式学級とは	
2 複式学級の現状	
3 複式学級における学習指導について	
(1) 学習指導上の課題等について	
(2) 個を生かす教育を中心に	
(3) 複式学習指導の基本的な考え方について	
4 複式学習指導とへき地教育	
II 複式学習指導について	・・・ 4
1 学習指導の類型	
(1) 学年別指導	
(2) 同単元指導	
2 直接指導と間接指導	
(1) 「わたり」と「ずらし」	
(2) ガイド学習による間接指導	
3 学習指導案の作成と留意点	
(1) 学習指導案の作成	
(2) 学習指導案の作成手順	
III 複式学習指導事例及び年間指導計画例	・・・ 11
IV 複式学習指導 Q & A	・・・ 25
Q 1. 初めて複式学級の担任になったとき、どのように教育活動に取り組んでいけばよいですか？	
Q 2. 複式学級の長所や短所は、どのようなところですか？	
Q 3. 複式学級の学習指導の類型には、どのようなものがありますか？	
Q 4. 1 単位時間の学習展開は、どのようにすればよいですか？	
Q 5. 協働的な学習を活性化させるために、どのようなことが考えられますか？	
Q 6. 学習指導案は、どのように作成すればよいですか？	
Q 7. 間接指導を行うときは、どのように指導すればよいですか？	
Q 8. 主体的な学習を進めるために何が重要ですか？	
Q 9. 学習ガイドの効果的な活用には、どのようなものがありますか？	
Q 10. 複式学習指導において効果的な教室環境は、どのようなものですか？	
Q 11. 一人一人に話す力を付けるためには、どのような方法がありますか？	
Q 12. 学習の評価は、どのようにしたらよいですか？	

## I 複式教育の現状

### 1 複式学級とは

複式学級とは、学級編制の方式で、異なる二つ以上の学年の児童生徒を1学級に編制した学級のことである。同一学年の児童生徒で編制される単式学級に対する概念として用いられる。人口の流出による過疎化や少子高齢化の中で児童生徒の減少が見られ、へき地学校や小規模学校に複式学級が設置されるケースが多い。また、大都市の中心部に新たに生まれる兆候も見られる。

低・中・高学年の隣接学年の全てが複式学級の形態をとったものを「完全複式」という。2・3年や4・5年のように、低学年と中学年、中学年と高学年といった組合せで編制された学級は、「変則複式」といわれている。

複式学級編制については、小学校では二つの学年で16人以下の場合、1学級編制（第1学年を含む場合は8人以下）とすると国の学級編制基準で規定されている。公立小学校の複式学級では、1人や2人とといった極少人数の学級があったり、男女の人数が偏っていたり、全校の中で兄弟関係の占める割合が高かったりとその状況は様々である。また、地域社会との関わりも深い。

#### 【複式学級を編制する基準】

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
国の基準*1	8人以下	16人以下	16人以下	16人以下	16人以下	16人以下
本県の基準*2	6人以下	14人以下	14人以下	14人以下	14人以下	14人以下

### 2 複式学級の現状

日本における子どもの数は、2004年を境に徐々に減少している。その一方で、高齢者の数が増えており、このような我が国の少子高齢化の現状に伴い、小・中学校において、学校の小規模化や統廃合が進んでいる。

本県においても、近年の少子化により学校の統廃合が進む中、既に、小・中学校数が1校ずつしかない市町村もある。このような状況にあって、少子化はさらに加速しており、今後、複式学級は増加する傾向にあると考えられる。本県では、このような状況に対応していくために、平成24年度に奈良県へき地・小規模校教育研究連盟との連携の下、「複式学級における効果的な指導方法等について」研究を進めてきた。

#### 【県内の複式学級を有する学校数 [( )内は複式学級数】

奈良市	5 (8)	吉野郡	5 (7)	合計	10 (15)
-----	-------	-----	-------	----	---------

(平成26年5月1日現在の文部科学省「学校基本調査」より)

\*1 「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」より

\*2 本県では、平成元年度から複式学級解消のための教員の加配措置が行われている。

### 3 複式学級における学習指導について

#### (1) 学習指導上の課題等について

複式学級は複数の異学年で編制された学級であるため、複数学年の学習活動を同時に展開しなければならない。また、編制された学年が少人数であるため、集団で活動する学習が少なくなるなどの学習指導上の課題や悩みが起こる。

複式学級での学習を行う上で、学習指導上の課題や悩みとして以下の3点がよく聞かれる。

- ① 複式学級における学習指導に関する用語が難しい。
- ② 一方の学年の児童に指導している間、もう一方の学年の児童を上手に自学自習させることができない。
- ③ どのような形態で授業を行えばよいのか分からない。

①については、「完全複式と変則複式」「学年別指導と同単元指導」「直接指導と間接指導」「わたりとずらし」等の指導上、聞き慣れない用語が多いため、複式学級における学習指導（以下、複式学習指導とする）が難しいと捉えられがちで、指導を行う前から「複式学習指導ができないのではないか」という不安や悩みにつながっているのではないかと思われる。②については、複数学年の指導となるため、児童が主体的に学習を進める時間の習慣づくりやその指導方法に難しさを感じているとともに、学習内容が多く、多岐にわたるため、「十分な学習指導が行えないのではないか」「各学年に対する配当時間が不十分になるのではないか」という不安があると考えられる。③については、複数の異学年が同一の教室を利用する場合、「黒板や掲示物をどのようにすればいいのか」といった教室環境や教材教具等の悩みがあると考えられる。

これらの指導上の課題や悩みについては、「Ⅱ 複式学習指導について」「Ⅳ 複式学習指導Q&A」を参照すること。

#### (2) 個を生かす教育を中心に

学習指導要領には、「第一章 総則」の「第一 教育課程編成の一般方針」の中で「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童（生徒）に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習活動に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。（略）……」と示されており、一人一人へのきめ細かい指導を行うことを通して、児童の「主体的に学習に取り組む態度」や「基礎・基本の定着を図る」、「課題解決のための思考力、判断力、表現力等を育成する」必要性について述べられている。複式学級は少人数であるため、生活面や学習面で、一人一人の状況を把握しやすい利点がある。こうした利点を生かし、学習指導要領が目指す「個性を生かす教育の充実」とは何かを、複式学習指導の本質である一人一人へのきめ細かい指導を通して、考えていくことが大切である。

### (3) 複式学習指導の基本的な考え方について

当然、複式学習指導においては、複式学級としての特性を踏まえ、学習指導の基本的な在り方や指導方法を考えることが大切になる。複式学級に対する発想の転換と複式学習指導の基本的な考え方については、以下のとおりである。

#### ① 複式学級に対する発想の転換について

複式学級は基本的に少人数である。これが複式学級の特性であるといえる。この特性について指導上の課題といえば、「少人数であるため、話し合い活動を行いにくい」「少人数であるため、集団での活動を行いにくい」等である。しかし、見方を変えれば、「少人数であるため、個に応じた指導が行いやすい」「少人数であるため、自学する力を伸ばしやすい」等の長所をもっているともいえる。少人数の特性をマイナスに捉えるのではなく、プラスに変える学習指導を工夫することが重要になる。

#### ② 基礎・基本の確実な定着について

少人数であることを生かし、一人一人に応じたきめ細かな指導を通して、基礎・基本の確実な定着を図ることが可能である。具体的には、個の学習活動を予測し、それに応じた教具やプリントを用意したり、学習の過程で一人一人の学習状況を把握し、指導の改善を図ったりすることができる。(p 33参照)

#### ③ 主体性の育成について

複式学級は少人数であるので、学習の場において、個別の学習や表現の機会が多くあり、児童生徒が自ら学んだり、自ら考えを表現したりする活動を十分に確保できる。学習指導要領では、変化の激しい社会を担う子どもたちに必要な力の一つとして、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」が挙げられている。「どのように話せば、相手にきちんと自分の考えが伝わるのか」「どのように表現すれば、きちんと説明できるのか」等の表現に関わる指導をより充実させることが重要となる。また、自分の考えを整理したり、発表したりする機会を多く設定することによって、個の能力を高めることができる。あらゆる学習活動を通じて、児童の主体性の育成を図りたい。

#### ④ 異年齢集団で学級を構成することを通して

異年齢集団で学級を構成することにより上学年と下学年が互いのよさを見付け、よりよい人間関係づくりが可能になるというメリットがある。また、1年ごとに上学年や下学年になる中で、上学年が下学年の憧れの存在になったり、生き方のモデルになったりすることも考えられる。このことは、単式学級であっても複式学級であっても共通していえることであり、メリットを意識した学級指導が求められる。しかし、その一方でデメリットとして、異なる学年によって学級を構成するため、学級内で発達段階や学習経験の違いなどによる個人差が大きくなることが考えられる。



#### 4 複式学習指導とへき地教育

へき地学校は、「へき地教育振興法」において「交通条件及び自然的、経済的、文化的諸条件に恵まれない山間地、離島その他の地域に所在する公立の小学校及び中学校並びに中等教育学校の前期課程並びに学校給食法第6条に規定する施設」と定義されている。へき地学校には、児童生徒数の少ない小規模校が多く、相互交流の相手が限定されたり、グループがづくりにくいなど、学級経営や授業づくりなどにおける特有の課題がある。こうした課題を克服するための方法の一つとして複式学習指導の研究があることを認識する必要がある。

これらの教育課題を克服するために、県教育委員会では、奈良県へき地教育振興協議会や奈良県へき地・小規模校教育研究連盟と連携・協力して様々な事業を進めている。

## II 複式学習指導について

### 1 学習指導の類型

複式学級における学習指導には図Iに示したような主な学習指導の類型がある。指導に当たっては、指導内容や指導方法についての組合せを考慮したり、工夫したりする必要がある。

#### (1) 学年別指導

複数の学年の児童に対して、学年ごとの教科書あるいは指導内容に沿った教材で指導する方法

- ・異教科の組合せによる指導
- ・同教科、異単元の組合せによる指導

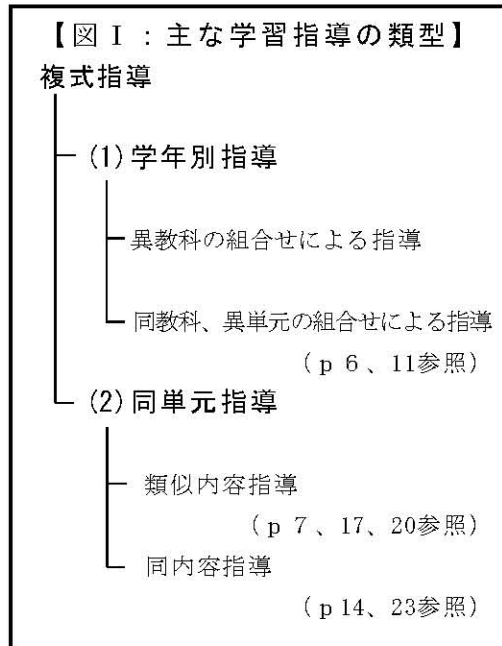
#### ① 利点

- ・教科の系統性を踏まえた指導が可能になる。
- ・学年の発達段階に応じた指導が可能になる。
- ・間接指導の時間が、児童の主体的な学習態度を育む機会となる。
- ・欠学年などの問題に左右されない。

#### ② 課題

- ・直接指導の時間が短くなる。
- ・教員の教材研究等の負担が大きい。

以上のような特性から、学年別指導は、欠学年がある、転出入が多いなどの理由により、単式・複式を繰り返す可能性のある学校で行われることが多い。



## (2) 同単元指導

複数の学年の児童に対して、同じ教科の同じ単元計画の下に指導する方法

- ・類似内容指導…複数の学年の児童に対して、同じ領域の教材を同じ時期に指導する方法。可能な限り共通指導場面を設定する指導を行う。
- ・同内容指導…学年の区別がなく、同じ教材で同程度の指導をする方法。例えば、A年度・B年度として2年間で2学年分の学習内容の指導を行う。

### ① 利点

- ・複数の学年に共通する単元を構成するため、基礎・基本を重視した学習内容となり、学習内容の定着につながる。
- ・共通の指導場面が多くなるため、一人一人に対して丁寧な指導を行うことができる。
- ・共通の学習場面が多くなるため、多様な見方や考え方が引き出せる。
- ・教員の教材研究等の負担が少ない。

### ② 課題

- ・A・B年度方式では、算数・理科など学年ごとに目標や内容が定められている教科では、系統的な指導が難しい。
- ・上学年の教材で指導を行う場合、下学年にとって内容が難しくなるおそれがある。
- ・2・3年や4・5年のような変則複式学級では、各学年の教科目標や標準授業時数（下表参照）が異なるため、教育課程の編成が複雑になり、指導が難しい。

以上のような特性から、同単元指導は、完全複式が長期にわたり安定して見込まれる学校で行われることが多い。

区分	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	
各教科の 授業時数	国語	306	315	245	245	175	175
	社会			70	90	100	105
	算数	136	175	175	175	175	175
	理科			90	105	105	105
	生活	102	105				
	音楽	68	70	60	60	50	50
	図画工作	68	70	60	60	50	50
	家庭 体育					60	55
	102	105	105	105	90	90	
道徳	34	35	35	35	35	35	
外国語活動					35	35	
総合的な学習の時間			70	70	70	70	
特別活動	34	35	35	35	35	35	
総授業時数	850	910	945	980	980	980	

学年別指導や同単元指導には、上記に示したように、それぞれに利点と課題がある。どのような指導が有効になるのかは、学校の児童の実態や教科の特性、単元内容によって異なってくる。指導方法を踏まえ年間指導計画を作成していくことにより、複式の学習指導がより有効に働く。また、複数年にわたっての指導計画も必要になる。

学年別指導（同教科、異単元の組合せによる指導）の展開例

【国語科：第1学年「おむすびころりん」、第2学年「スイミー」】

第1学年		過程	指導者の動き		過程	第2学年	
学習活動	指導上の留意点		直接指導	間接指導		指導上の留意点	学習活動
1 めあてや学習方法の確認。 ③のぼめんのようすをかんがえて、おんどくしよう	・本時の学習課題を示し、学習の手順を確認させる。	課題把握	直接指導	間接指導	習熟・応用	・前時までの内容を確認するために音読するよう、指示しておく。	1 前時までの学習を踏まえ、音読する。
2 各自で学習場面を音読し、気付いたことをワークシートに書く。	・書き込みができるワークシートを配布し、書き方を説明する。	課題研究・解決	間接指導	直接指導	課題把握	・本時の学習課題を示し、学習の手順を確認させる。	2 めあてや学習方法の確認。 ④のぼめんのようすを考えて、音読しよう
3 書き込みを基に気付いたことを発表する。	・場面の様子について、想像を広げられるように、挿絵やペープサートなどを用意する。	まとめ・定着	直接指導	間接指導	課題研究・解決	・書き込みができるワークシートを配布し、書き方を説明する。	3 各自で黙読し、場面の様子やスイミーが思ったことについて、ワークシートに書く。
4 発表で気付いたことを、音読に生かすように練習する。	・ペア読みや一人読みなどを組み合わせて、場面の様子がよく分かるように音読させる。	習熟・応用	間接指導	直接指導	まとめ・定着	・挿絵や吹き出しを用意し、想像を広げられるようにする。	4 書き込みを基に気付いたことを発表する。吹き出しにスイミーが思ったことを書き、想像を広げる。
5 2年生に向けて音読する。 6 本時と次時の確認。	・本時の学習で分かったことを、ノートに書かせておく。		直接指導			・本時の学習で分かったことを、ノートに書かせておく。	5 1年生に向けて音読する。 6 本時と次時の確認。

※他にも同教科、異単元の組合せは、各教科等で数多く考えることができる。

同単元指導（類似内容指導）の展開例

【算数科「グラフの見方」（第3学年「ぼうグラフ」、第4学年「折れ線グラフ」）】

第3学年 主な学習活動	過程	指導者の動き (指導上の留意点)	過程	第4学年 主な学習活動
1 めあてや学習方法の確認	課題把握	○2種類のグラフを提示する。 3年「本を読んだ時間」 4年「月別の気温」 <b>グラフをよもう</b>	課題把握	1 めあてや学習方法の確認
<b>ぼうグラフをよもう</b>				<b>折れ線グラフをよもう</b>
2 今日の学習内容の課題把握 ・解決の見通しをもつ	課題研究・解決	学年ごとに調べることを考えさせる。  よみとったことを記入するように指導する。	課題研究・解決	2 今日の学習内容の課題把握 ・解決の見通しをもつ
3 課題解決のための活動 ○どんなことが分かればよいか考える。 ・曜日ごとの時間 ・一番読んだ曜日の時間 ・一番読まなかった曜日の時間 ○ノートによみとったことを記入する。				3 課題解決のための活動 ○どんなことが分かればよいか考える。 ・一番高い月 ・一番低い月 ・折れ線の長さ(傾き)が違うこと ○ノートによみとったことを記入する。
4 課題解決活動の結果の発表 ○よみとったことや分かったことを話し合う。 ・一番読んだ種類や読まなかった種類 ・どんな本が好きか ・△△は▽▽より◇◇多い				4 課題解決活動の結果の発表 ○よみとったことや分かったことを話し合う。 ・一番高い月、低い月 ・気温の差が一番大きい月 ・気温が低くなる月
5 本時の学習内容を基にした練習問題への取組 (個人、ペアやグループで) ・ぼうグラフをよみとる練習問題に取り組む。	習熟・応用	それぞれ練習問題を通してグラフをよみとらせる。	習熟・応用	5 本時の学習内容を基にした練習問題への取組 (個人、ペアやグループで) ・折れ線グラフをよみとる練習問題に取り組む。
6 本時と次時の確認				6 本時と次時の確認

※他にも同単元指導（類似内容指導）の組合せとして、理科「電気」（第3学年「電気の通り道」、第4学年「電気のはたらき」）

## 2 直接指導と間接指導

### (1) 「わたり」と「ずらし」

#### ① 「わたり」

同一時間に複数の学年を対象として学習指導を行う場合、直接指導と間接指導のバランスをとりながら授業を進めていく必要がある。この場合教員は、直接指導と間接指導の組合せにしたがって、ある学年から、他学年へ交互に移動して直接指導を行う。このような教員の動きを「わたり」という。

例えば、二つの学年で「わたり」を行う場合、一つの学年の直接指導を行った後、次の間接指導の指示を行わなければならない。このような直接指導と間接指導の一連の流れの中で、学習活動が二つの学年にまたがって行われる必要がある。

【図Ⅱ：わたりと直接指導・間接指導】

時間の経過	学習段階	指導者の動き		上学年	学習段階
		下学年	わたり		
↓	つかむ	直接指導	↓	間接指導	深める
	調べる	間		直	つかむ
	確かめる	直		間	調べる
	深める	間		直	確かめる
次 時					
↓	つかむ	直		間	深める

(図Ⅱ参照)

#### ② 「ずらし」

「わたり」を効果的に行うためには、指導段階を学年別にずらして組み合わせることが必要である。このずらした組合せを「ずらし」と呼んでいる。「ずらし」を計画的に行うために、指導過程(例：問題把握[つかむ]→課題研究・解決[調べる]→まとめ・定着[確かめる]→習熟・応用[深める])の段階等を分けることもある。(p 9参照)

### (2) ガイド学習による間接指導

複式学習指導における間接指導の効率化を図るための方法として、児童の中からガイド(学習の案内役)が教員の指導の下、学習計画に従い、他の児童をリードしながら、相互に協力し、助け合って学習を進める方法がある。これをガイド学習という。(p 31参照) この学習方法によって、話合いや意見の交換など、児童の主体的な活動を促すことができる。この学習を行うためには、教員はガイドとなる児童と、授業についての大まかな流れや指名の仕方、順番などについて事前に打ち合わせておく必要がある。また、ガイド学習を有効に行うためには、普段からの学習習慣づくりが大切になる。また、ガイドとなる児童は、あくまで間接指導の効率化を図るものである。指導者が授業において指導すべき内容とガイドに任せる内容を混同しないようにしなければならない。授業を指導するのはあくまで指導者である教員であることをきちんと認識しておく必要がある。

#### ガイド学習のすすめ方(話型の例)

##### ・学習課題の確認の仕方

今日の学習のめあては～です。

ノートに写しましょう。

##### ・話合いの進め方

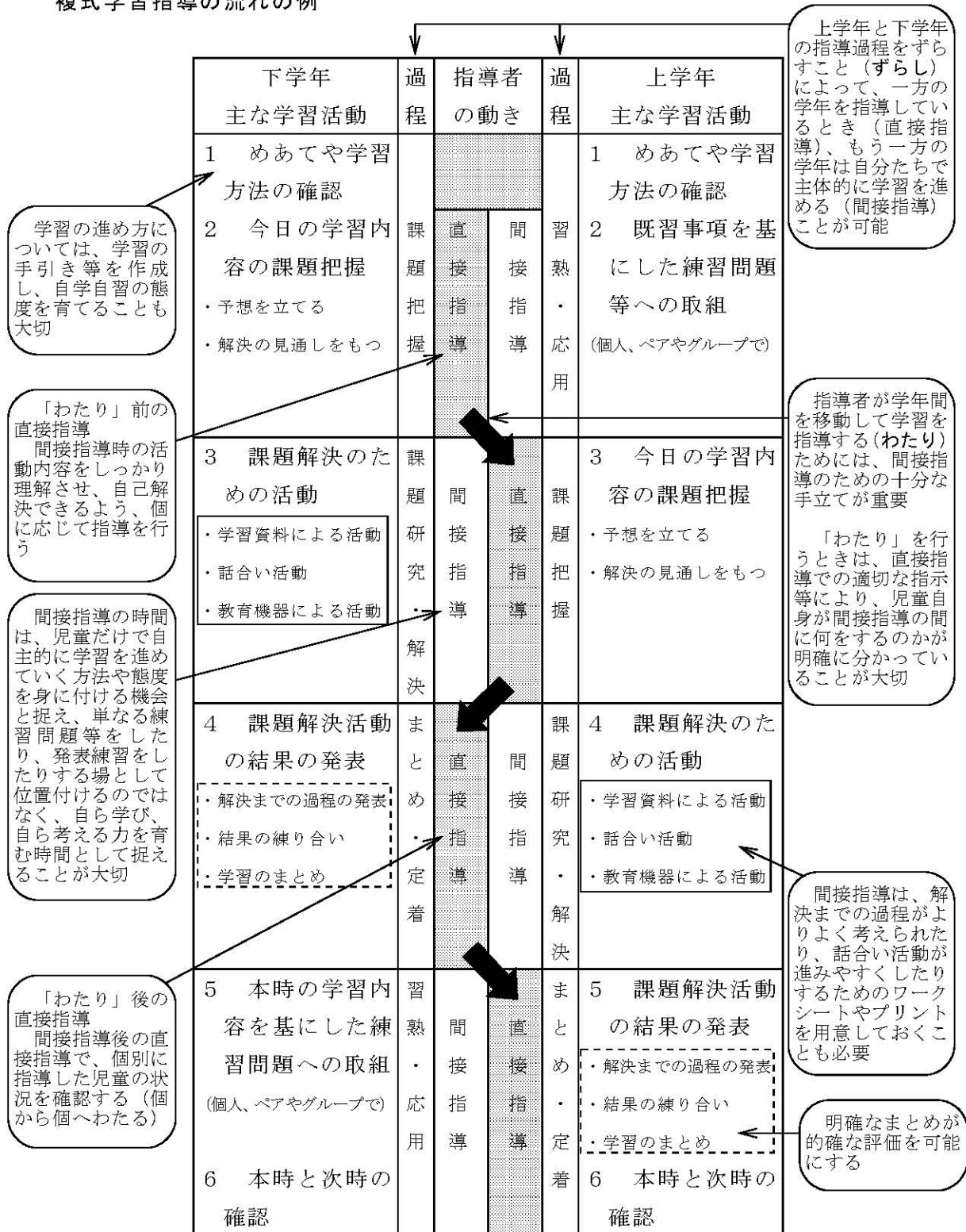
分かったことを〇〇さんから発表してください。

他に意見はありませんか。

##### ・学習時間の設定の仕方

問題を考える時間は〇〇分です。

複式学習指導の流れの例



- 【直接指導の主な配慮事項】**
- 学習意欲を高めるため、問題提示を工夫する。（実物を示す、既習事項と結び付けるなど）
  - 学習の手順を確認する。（方法や量、「終わったらどうするか」など）

- 【間接指導の主な配慮事項】**
- 学習の手順を示す。（掲示物、「学習の手引き」など）
  - 学習の手順を確認する。（教具や辞書、ヒントカードや発展的な問題、発表ボードなど）

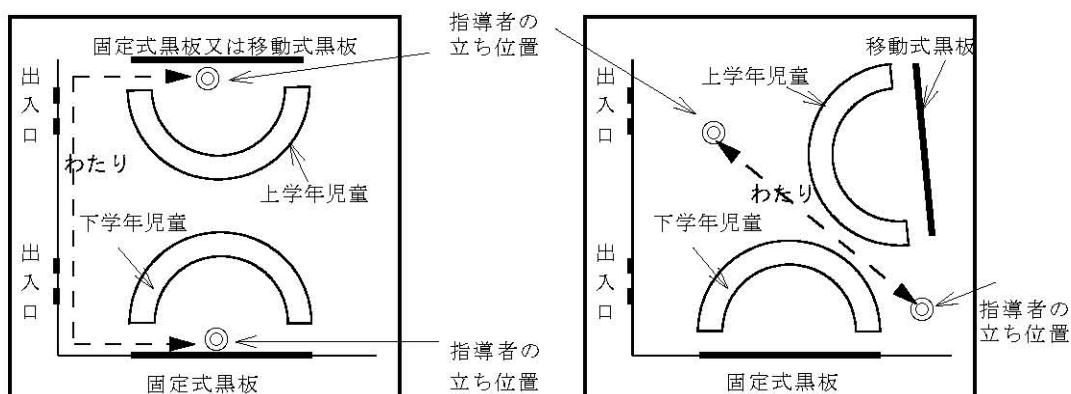
### 3 学習指導案の作成と留意点

#### (1) 学習指導案の作成

複式の学習指導案の作成には、複数の学年にまたがった学習指導要領の内容の把握が必要である。複式の学習指導を行うためには、単式の学習指導を行うよりも、教科の関連や系統性、学習内容を深く把握しておくことが必要であり、発達段階を踏まえ、どのような学習方法（問題解決的な学習、討議や討論によるグループ学習など）が適切なものか、どのような課題を与えて学習を進めることが有効であるかを考え、年間指導計画、単元指導計画、本時の学習過程に反映させることが求められる。

#### (2) 学習指導案の作成手順

- ① 単元の設計（年間指導計画に基づいた単元設定の理由）
- ② 単元目標の設定（異学年それぞれの目標）
- ③ 学習内容の設定（学習指導方法の設定）
- ④ 学習指導過程（「わたり」「ずらし」を示した学習指導過程の作成）
- ⑤ 教室配置（例）



※各学年の児童が集中して課題に取り組める。

※各学年の学習状況を見取りやすく、同時に間接指導を行うときに効果的である。



野迫川村立野迫川小学校における複式学級による学習指導の様子